藤のうら葉　十九

詞花名やまと

利
20
29

へ12
20
25

号 へ 利
円 號 20
巻 29

保氏卅九戊の三月より十月までの歌合 吟花銘甚夫へ タん

流いそぶれ福まも寧わの中ねいあづまぢにて
ほれぐしき心ちするを何はあやしくこそ
心あずらしきうねきぞうしおれがちまうせあく
あまつぶ関ありのうちもわめべきとりしさ紙ごひ
あまり給ちまうとさてあずらしおもあずらしくはひとゐろ
うらぬさ優よびそてむとねんずるもくるしく
いかさえ給めざくしもおとゞのゑすめ給しこくの
すゞどもしさもあらぶあまのあまりまうくと
あげしうそおやさくそむきくまさみすがある
れかろ意ありおとゞもさそころづまがり給し
うどらけうしめまおぼしりづるひてぞれさやまも

さやうなるちぎりにて侍らば、又さらくおもしろきあそひ
くづしりんほど〳〵人のこゝろもくるしきし。ワがれうち
ざ侍りも人ワしもれ入りをのげしうらく
ちさことやまじらんぢのつとすれどうちくの
ことおやまりもせなまりなるべしどうくまぎる
りて於まけめべきちありと思しありめぐ人へ
つれなくてうしことけぬれ中なれバゆくりなく
いひなんもいうどと思しもどりなそてごとく
ちくむてなきんもびとれささんところせこなり。
いふならつゞでしてりハほのめくすべきなど加賀
するゝ三月廿日加賀少蔵の加賀こやの吼忌日まで。

極楽ちるなまうでゝまへりぬぶちうら絵ひこさすれいさ
ほひおしまほちく上越アなどもおまぐし宗つどひ
なへるゝ宰相の中将おさくけるひをとらずうそほ
しくそぐくちなど、ふぐい歯いうじこさうりな
わびりて、とりおつめ先でうさ人の外有様なり。
このおとゞをバつしとお寒語しよ里、なくし
なうも心づうひきられていとゞいくうあうりいし。
まてきづめてまれし語れ、おとゞもつねよりハめ
ちゞめ語こず理なれど、ハ六条院よりもきこせのまへ里、
宰相の気ハおしてうろげをとりまちておちられな
いとなまこつうりまうり語、夕付てこれうへ里語

ほど花はこれちりうかれ露のごとくあさましきおとく
せうし出て女梅めしうすそかさねずめ
絹宰ねもおもれなる夕のくしきはやうくうち
ちありておもげなりし人ごのさりぐはちなきちなめ
いりて入ぬのへりごろとさきめさりこ絹しくや
まけん袖をひきしきておなじいとこよなくま
かうじなくまくるかふのこのりの恋よもかず
物語づくをゆうしのそこらやのかりすくなくなり
ゆくする恋の世よかひすそのへるもうしくきも
べくなぐのくしまんべうちうしこまりて恋みし
れどもむけも代にきてなすべき恋さ梅なうけ

絹りさくこと待しかじゆうしなるやれたしさる
はかりつくなじきて絹ごろおはなくしまる
おまうぎるにこれちりぐよきをひくりのめぐ恋
いなるぞて例なしずさしずこ絹つくんなじよ
とくまる心をきけられおくりなれべうくなすさ
ここなれどくことどまりてとやうやくおもひ
あし絹こうしの身代のらひのきうしまや代
おもどもなずかりなく花しうもりつぢらなきつい
でのワざとはなくさずなよつさぐしりうんを
おばすよ生月のつりさぢかおまんの夜の花いと
おもしうささうかれてかれつるの文なるしずかぐ

かりこすぐさんことおもしろさかりたすかゝりお
そびあるさしめて嵐山行のいとゞ花まさかれかゝま
乳中ねしてれもうそこあり二日の花のかげ志ゐ
封面あすかゞゆしゆしをれいと浅あしぶらかゝり
給ちんやとありれかゝまは
ゑらが宿の翁のなこゝさぞされるふびわやハ
うぬ甚のかぎりをばけよいとおもしろさ枝まつけ
めぐりおゝちつけかへるもこゝろときめきをしれて
しこまりこゝて給
ちすくよおりやまどりんかぢの[illegible]ぞ給
どきのぬぐくしくいと男そぐあおすくこそ

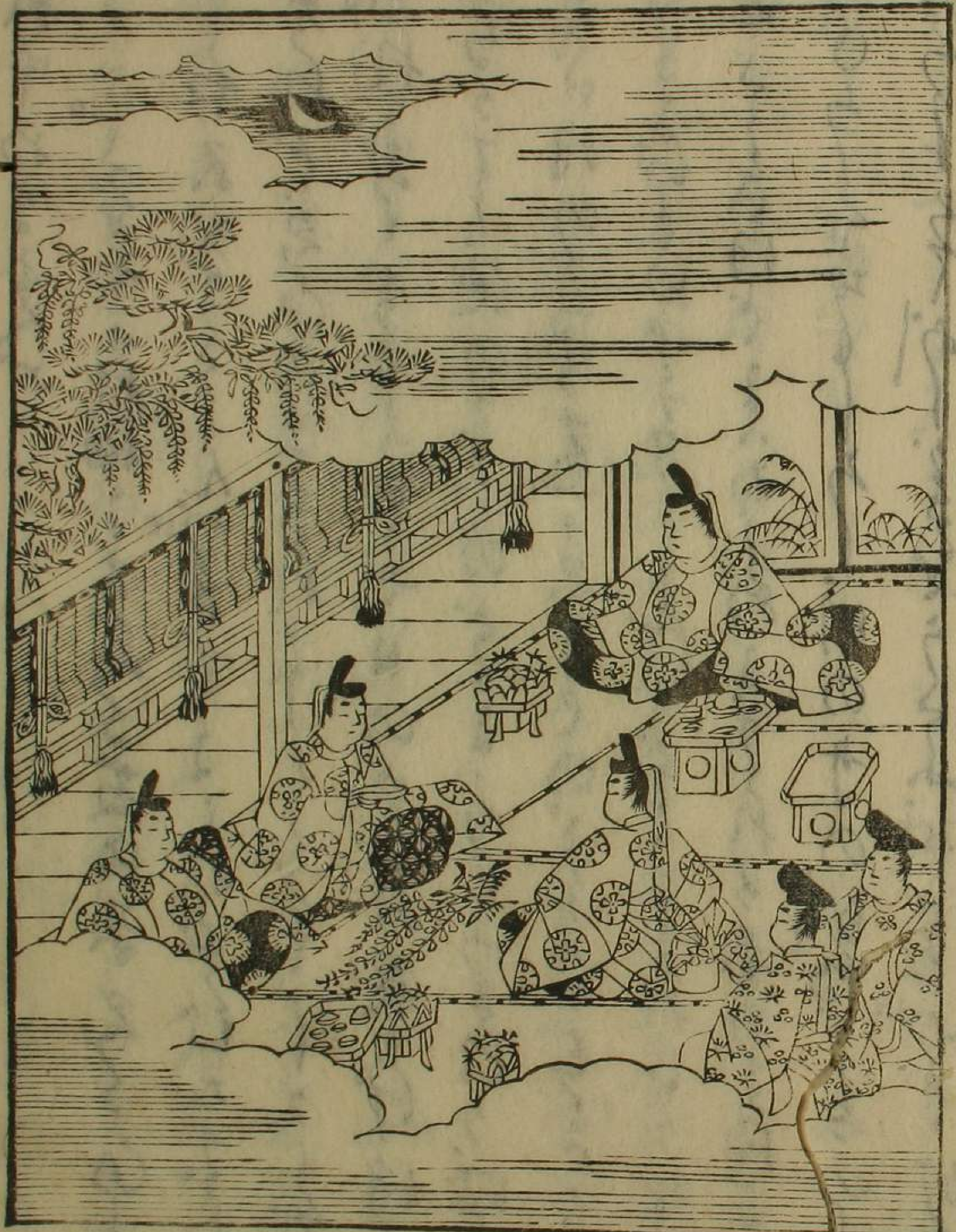
おうしるされどりあるをしめへよりさそし給れ
ともまこそとのあへばワづらうきすいざれんし
いあるそへし給むかしどのおまへまそりくなすん
とそれしんぞさせ給ぞやうあそて抱しめへ子
まやおとん。さもすことあれし給もぞこそいすざ
ありしくのげうちかりしうしこもとけめとの給
心をごりこゝよあまうわるげあり。ぎしも待しじ
あいのまへのかぢつれかりも面白く咲て待あかを
きげあすうゝろ恨ひるればおそびちんあぐまや待らん
とや給ワざとつゝひされかりけるをもやうもの
志のへとゆかし給ばあるしんとおくまへあるしく

くだらず。おとゞもこそあまりこゝろぐるしがれ
非参議のほど、おはしまさせ給ふ人々そ、ゆるくあひは
まけれ。ひきつくろひんやとて、世がれたりの心こと
あるまえなしぬれぞどもくしてれときまかる
きて給はれ給ひ。世がれ方までそうろづうひいらしく
けさうじて。うへそれもすゞさ心やましき程ども
まうでゝ入りおほとのゝあさ中納言をもはじめて。
七八人ちかつきてむかへいれたまふ。いづれともなく
おかしきかほちども、あれど、おほをひとつにすぐれて
おぼやかにさえ、まことに抱かしおかしうかしこき
まづしけなり。おほくだおほしひきつくろひをちなく

し給れかういふころかなかず。かりうかなきかし
みて出給とて、おほいとのの中のいまき女房おほつのね
きて、こゝへいとかうさくなわびあさき人なり。
かういふまじいともちげりまた、抱しちやおほやうまぬけ
いで、おほすけいろうまいらち、ゝをとにまとも、なるまも
おほ大方あそばされ、それいゝ身いとかしこまるまなほ
めしうあいひつきて、いろいる人々まじく世中に
すうゝ心ちぞし給。御ほやけがほもすゞしうも
わておぼしれうかゝるとなかしぶきかずぞうし、それは
ざえのきこゆるもあまりそうころもちねおとしくすく
あるまじうひかうとせむなることありまじのゝそ。

「地」ひきつくろひてぞたいめんし給ふ。それよりまやうり
むべくしきれは抱〔?〕にすゞしむりえて。きられき
けりまうり給ぬ。芸の葉のうすれとなくられひらけ
出るかはこゝよ。めおざるぬにあさきをうろうじうく
うちすてくちりめろがうしめしうちばゆかところ
はひこの葉のひとりうちをられて哀はさきうろ
ほどあん。おやしくろろまくてあされはおぼし
もべる。いろもちる。ちかつしきゆりまもきの
べしとぞ。「地」うちほゝゑみをまへるかしきまりて白ひ
きさけあり。「七日ノ月之」有はさしいぞぬれど。葉の露ぞころ
きぬほどあるをまそてあそぶ。すぐろかなきなをそて

あはさき来りれあそびし給ふ。おとゞはあく
そうゝ思ひせしめて。ふぶりがたくしくきる思ひ
給せ。「夕」さうこうしてひくすまひちやめり。哀そ
すゑの世にはあまりまでおめのきるのゆうそくは
抱し給めるを。ようちひかりめる人。おほひすて給
あんつくりけり。文籍（ゑせき）にも礼（れい）といふことあり
べうや。「夕ノ昨返をたく」おほよそしのぞへもよく覚しそうんと
さひのつるを。いゝう心あやまし給と。うしくるこゝろも
べくあんあぢのめで。「地」思ひあきまや。おうしく給は
気色げずこ給。「夕詞」いてうむりしを「たた大文ノ〔?〕」ものへ出かれりきるま
どもには。身をそつき夜にもとをそせさゝへきり



琴をはるまゆんじあすゝとまうけはんべらん。
まじらひをうるかたのをこなりけるてと。
うしこまり実方は絃とさらくさうどきて蔵乃
うつ笛のとうちぜんじあへる風色を給りて。
朗中将笛の色ことよるかさねぎきをかりて。
あらうとのれ盃まくらひとりてまであやむるおとゞ
むらさき紀まうごとゝいりけん笛の笛まい川より
すぎてうれしされども寧ねさらづきを指ちあぐる。
なしきとのりもつまりかへる夜いとゞしあり
いくくわ露けき袖をすゞしそ笛の
ひもとくありまあらん

頭中ねるのへば
うきやあれ袖にまくる萩の葉ちるひとく
くやしもうらしんづきくにられぬむなすがら
见れど思ひのまぎれなりちらくしうらで
られるにまさしまで七日の夕月夜なげ成乃
たよりて池のでこのどらにみずにつわりげる
まぢ成のちるまずゑどもの、さうじぐ志さらわ
ちるまいづいゝうるしたげにちこるれうろ松の
末ぶらき成どにはわしぬようわろ葉のさ滴にの
つまちまずかしろし樹の本の下をあはれ
あつしくそわりぎうらふ、おとぐのとけや

けうもつうまつられと打ちぶれあて、さしへだて
けうこの家のとうちうくさへゆへ家、此と思ひわ
おもしろし、おりしるほどにこぶりぐさしらされ
おそびまで袖もひのうしずちりぬめり、やうしく
夜ふけゆく影る、ひうう色ちるやこをしてこぶり
心ぢいとらんぐうして、おうぞんきもほどくちく
うそ待りぬべうれ、萩の露ゆづり絡てんやと、中ねは
うれへ絡、おとぐ、絡に時や此やすき露まくめよ、おとこ家
いうく思ひすくこて、ひしいちれば、まうう入ぬとうひ
まそくいうあぬ、中ね葉のしげの据ねよりうにぞや
うるしききちるべまぞ待やとゆへば、松にちぢされうか

あぶさかう茶屋は。ゆくしやときめ給。中ねハころろ乃
まちかねしのわざやとらう南あれど。人ざ俺のさふ
さ俺にめでらさまかう。もありちてあんと。ころげ
わろくちあれバ。うちろやすくきちびころ。おとこ
ぢいハ。義うと也ばし給ゑも。ワざ男いとぐちげうし
くぞ覚しのひ気くし。糸ハいとちぢりとさひ
志ろそまれし給も。ねびまされつれ盲様ハいとぐ
あらぬ事ちくめやすし。世の気しまもあり給べ
うつろ男をごろもてこそうまでも也ばし
ゆうさうめれ。気を志り給いぬもさ俺ことおあらハま
それとらしく実き給。かねのをすきいぞしつつお

がきのをもむきハぎしとゞめ給つや。いくさぬし
我くうもぐちのとえ。さしいへまほしかを
つれとのめへバ。女いとえくまくしと也ばしうて
あふさか名をいひあらしけう河ぐちもいぐ
まして関のあふぎさ。おさまりとの給さ俺。いと
こあきさう。ずうしうちワくひて
まりまけつらさぶの関をうぶつりのあさこさま
のこハあふをざつちあん。辛月の川まりもいとまう
あすくあやまりこさま。拙也ばしずとゑひまりうちそ。
くらしげるまであて。あくらもしらぞばあり。
ひとぐさてし。よづふをあとぐしらくうばなすう

あさいふれどとよめ給ふ。されどあやしくてぞい
で給ひぬ。これのあさがほの宮うひのあまりし。
此文は、みちの紙志のびつつ宮のうちのこころづかひにて
あつきを。中くそふは見え給ふなを。地ひひさぶらふさ
ござちつきしろふる。おとどりて給ふで。いと
わりなきや。づきせざりつれなしこそり。中くい
とぞおもふる男のほどきを。こへぬところにまる
きしめべきを
とふむちよしのびるしほってもちふさふ
あしもうし袖のしげくを。おとどいとちれば宮あらげ
ゑふて。まをいゑじくもろきちうれまけられちど

の給ふも。むかしのあざやかなりし。此返しいでて
ざけなれば。ぐるしやとて。さも思ほしちぢりめ
べきことちれば。げにかすぬ。此後のうくちぐべてなれ
宮はまへり。中納言ことの宮はまでなし給
つれなひさくしつうろへ。あらまこそしれりく
ひ。そふるおもとちよぜ人くしくかうまみぬり。
おとのぞうなる人のむつましく思ほしつひ給
なりたり。六条の御ならずも。くとこそうしめてぞり。
宰相つのよりもひかそめて気ありまへれば。うち
まもりみて。げさいはいるかくちずまれしけや。
さして人も。女のすぢはこぶろくるあるを。

人はかくうつしひろめつれをですぐされける
ちんずうし人にめでけりけれるとおぼしけるが。
おとこのれをさそてのおまりすくてちぎりちく
らけおれ給ふるを世人ものひゐつるとおもんや。
さりとてもけしからぬりしかに心をごりして。
ますさく志つき心だち人ちかくもし給ふ。ふかくそお
つくる御語さちる心をさそてとふあれど。志るさの
心だち人おもしろうずくをおりて。人みしつくき所に
つきのへる人をりたまどれいのそまへさうしかふ。
ふかうちあひめやすされおもひと御付さる子
ともえこすずしきのここちりとさし給ほか

ほかりてはおもはず御をうけしとうりうなとみえ
ゆかねどおもんるにそては。さ夜ぐあれめでたし。こと給
へりおくらぶいうすさきれちりぬし志ろさきれぞのう
ゆきうろか。もんけむやるつやくとすさきころを
まうて花つきをおもあそてよる夜めしうおりします。
宰相殿はすうし女かりされちもそしまて子ぞの後
ろぶろまでふかる。志ろさわやの女りしこう段
さあへる。こしさしめふそてえんまこみゝえん仏かて
まりてれ導師をそく並りされど。日くられて清
うさぐうりけしちんいうし。ふきるど。御段や宰
ぶ夜はうえしずこうくくましのへるを。清まへ志

さほうせうけして、君達などもまゐりつどひて、なま
めかしうかりしされ前よりとも、おやしう心ばへ
きこえて、おもしろかるり、寧ねはしげうるちなく、
はなやけきうじひきつくろひて、世継、けざやかな
るほどなるけぢめ給はる人は、うしろめたくおぼも
ありぬ年代の御ありさまをへて、今はやうなる
れなるはひなあれば、いづこもあんやくし、おろかにも
おとらずもいとど志きちまさりをうけらしき梅る
御ほしてやうじうそうしづき男様、まけぬるる
の口初しう後程おぼしまどひつつも、御ろまじうぞ、まめ
やかなる心をば、御年代にと心なくてわりなきを

げしかへるなどせ、おりがらうそうしゆかす、女御更衣
有様などしらりも、覚やかるめでたく、おもしろし
されば方々ふかふかくなどは心ようしげきひつふも
あれどおほくの御らしきさきあかん、おぼろげの小方
などもかかるとてうけしとさかさしてぬるなり。
かくて六条院の御ありさまはまいそなるのほどなりそう
さいのうへにあれよまうでのふとそれいのゆるか
さいづるひとさしのへどもなくさしもひさつで
きて心やましうを見して、これもくとまりき
あてうとくきさほどよまもあらずれ車女だちるを
まてれいでんなどもかくもちさき人なすおほらと

わゝす事そざゝろ志をけるひとゝなりぬ。まつりの（賀茂まつり之）
日のわろさまゝまうでゝのて。人さまは抱何しんぞ
べきれうじ さるおもしますれるぐの女ぞらう。
そのく車ひきつでさそれまんへところくしゆ
うち程いあしうられいそれとさためつる。おどろ
おどろしきれつさ御ひなり。（源氏）物どくも（秋好）中宮の御
母みやす所の車をしさけられのへりし物りの
こし出して。時まろこゝろどぞりして。さやう
なることあんなるさまことぬけるぞまちくさひ
けたうし人もおちげさ物ふやうまそらうくちりゝ
さくそのほかの絵をちて。御りとまれる人ぐも。中宮ハ

うくさ人まで。まづるあらのぼりめりて。（秋好）こゝやいちゝう
ひなきさすぢまそおりみすりも。御身へいりしこそ（宮仕）先
なれずべてつくさざめなる世なれげにそ。何よりも
世ふまゝまそいけるさぎりの世をすぐさ後かし
それど。のこり給りんする無の世なるどのさらしへなさ
おどろへなど。そさへ。もひもどりられぞとうち
なうひゝめて。（地）上遊アなども忍さじきまま来りけるひ
めくれど。（源）そならまよ出のあら近衛づかさの使ハ。（柏）頭中将
なりそりく。大番まで。出ころ所よりぞ人ぐハ来り
給ける。（惟光朝臣）らうちゐしのすけもつきひなりそり。あざ
こともて。（冷）内裏ようもうぢめなりて。（法）六条院など

よりも大殿とぶらひども所せきまで御こゝろよせいと

めでたし。宰相の中将。(藤内侍ノ)いでたちの所にさへ

とぶらひ給へり。うちとけずあはれをかはし給

ふ中なれば。(夕ノ)やむごとなきさまにさだまり

給ぬるを。(藤内侍ノ)たゞならずうち思ひたり

(夕)なにとかや今日のかざしよかつ見つゝおぼめ

くまでもなりにけるかな。(地)あさましとあるを。

をりすぐさぬばかりを。(藤内侍)いかゞ思ひけん

いと物さはがしく車にのるほどなれど

(藤内侍)かざしてもかつたどらるゝ草の名はかつらを

をりし人やしるらんはかせならではと聞えたり。

はかなけれど。ねたきいらへとおぼす。なほこの

(惟光娘)内侍にぞおもひはなれずはひまぎれ給べき。かくて御

(明石姫入内)まいりは北の方そひ給べきを。(紫)つねにながく

しくはえそひさぶらひ給はじ。かゝるついでに。

(明石上)かの御うしろみをやそへましとおぼす。(紫上)うへも

つゐにあるべきことのかくへだゝりてすぐし給を。

(明石)かの人もものしと思ひなげくらん。(明石姫)この御こゝろ

にも今はやうやうおぼつかなくあはれにおぼし知る

らん。かた〴〵心おかれたてまつらんもあいなしと思ひ

(紫上)なりて。このおりにそへたてまつり給へ。まだいとあえか

なるほどもうしろめたきに。さぶらふ人とても

わしきのところにおもはれぬれとくちも、ことを
よるぬことの心はてるかざりあかさを、こげかしも
えのとしもまつるはさしんほどうちろやすから
べきとさとしめんば、はとよくおぼしなされと
思して、きるんとおもひしまもらんひの給ふれば、
わらしくられしどやうとまつひ給ひちして、
人のきうぞくあるまものこともやんごとなきされ有様こ
とうまじくいうそござる。おまじきあん。あれこのれ
おひさきこちらんの心かくてけつのまひとつび
こなたの世をやといのちとさへもちかねてなん
じけるをいふて人とやふもかるし。その夜は

紫
かく人ゐてまりおかはれて車まちくざう。うち
おもてむき人はかくべきをとは、おぼしひらく
らず。ふかくことさしおち給ふのまたまて、わが所へ
なくかつをおはつらじう心ぐるしうおもふ。地 あれま
いりのさしき人のめおどろくぞうるさのことはと
しとおぼしつめど。なのづくよれつるのきはの
きぞあしぬやかざりもあつくしつきすへなりあそ。
紫
かく人います。かねあはれなうけてしとおもひてこそ
給ひつけても人をゆづりましう。まことりうる
ことものしらばとおぼえて。ちかくとも宰相の君も。
らくこのうへひとつなまん。おもぬことかるとまたれ

かほしけり。三日すぐしてぞうへいまうでさとりし。
ふちうちてきり給ひ。御対面ありてかたちなび
給けぢめなるん。年月のほども志られ侍れど。
うとく志さへぞては。おかまじうや。ともかくう
の心で。抄紙なども給。これもうちとけぬるをじめ
ちあり。まれなどもうちつひろけつひなどもんべそて
ちらくめきぬ志らう給。文つとけるうきりちかれ
そしきぞうてまめてさしとえて。ぞうしの中よも
まぐれところぞしりておぼしびなきさ給ふ
さぶまり給けるも。つとこつりとせひ志てる。
かりまでうちなしび夢ゆるちぎり深ぞなかりやいと

思はれうづて給ぞうしこさのつとこよこなほしく。
れて車ちとゆかされなで。女れのれありさ給ふり
こしなるぬをもちひくずらまさすゞるうすのゆぐ
ありつとうけくげるひおちれやうなられ有給ふを。
宮のうちしてこまうも。涙のこゝらぐまうしめて。
ひとら袖とぞこしぞりけろ。年ばよろげなるげさ
志づさ給ふぐうさ身と初めひくしけるいのちも
のべまほしうぞされ。ぐ志さとにけてぞまつとよ
すこよしの神もまろなるすゞむしくぞよさ給ふ
まうしづきまうて。こうちなきすゞぬことちらく。
かさくなさ人のらうくしさみれば。かきめ

（浄）よそに聞しよりもはじめなべてなしぬれあひし御（吟右衛門ノ）
くるしきなかさ家もひきされ心ちよまじころもとは（主役）
心ひとつにめぐりがどころまくるれうくのへ
なにはこの母君（吟右）のうくてさふしひのふをござする
いひなしなずすれどぞされはけるんぐもあるまで
いまめしくなるびなまさをばさうすもいはず
こころまろうしあられけまらひをちかなさくらに
つけてもおしまほしくまてなしまをしかへれど
多じんなどもめづらしさいど家まそでぞりぐに
きふまへんでも心をうけうらに女房のようい有之御
さいふじくとのへなしまりう（生）へもさるべき

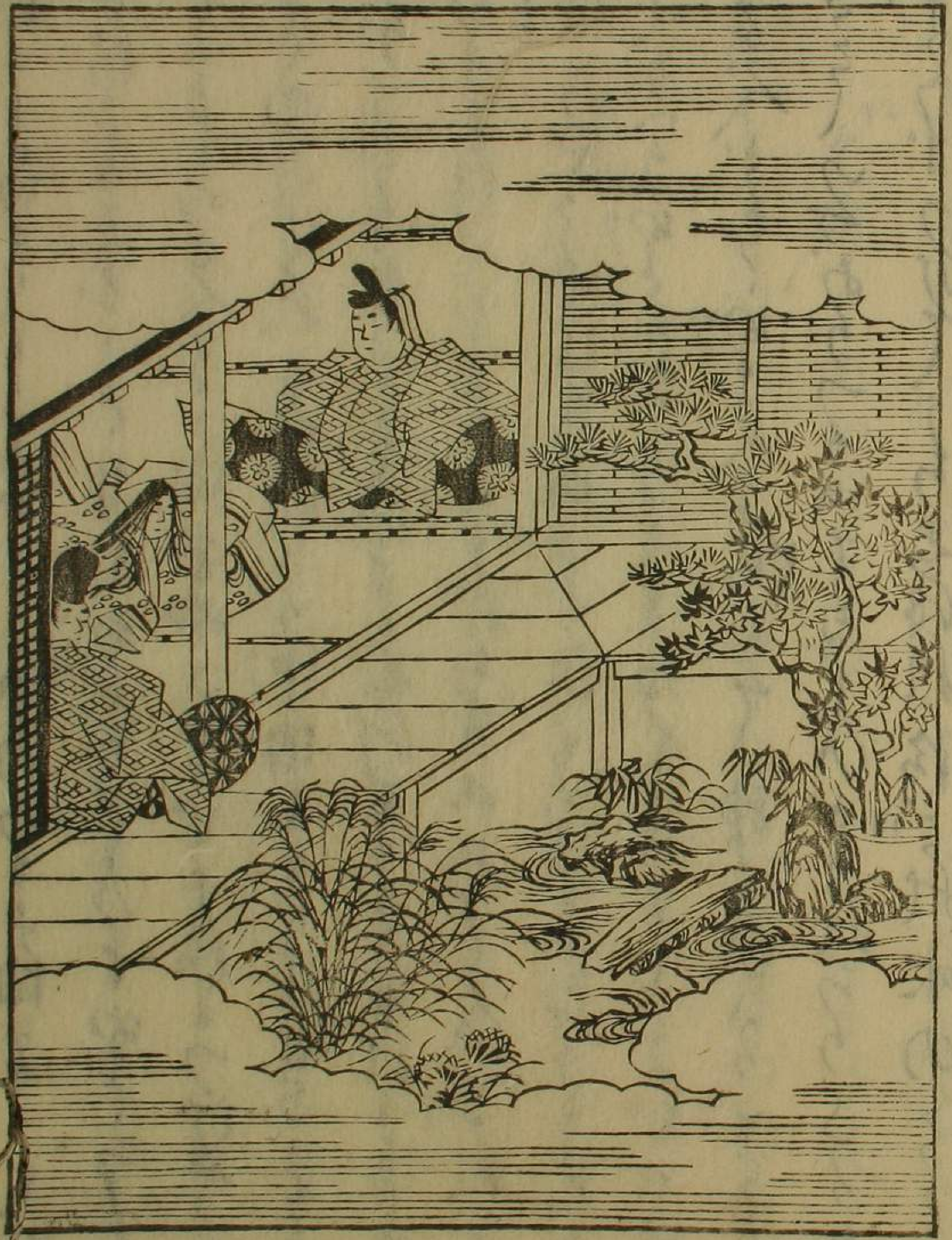
おりふしはまつり給ひれなりしひおしまほしく（生と吟右と）
うちとけりまきりとてさしすぎ地なれぞおなか（吟ノ）
づりしなべきまてなしちる露なくおやまう
おし海ほしき人のれおりさ海こころぐへなりた（浮ん）
とげもおなぐらじのきかげさうし世の心なる
まとおほしつれまりのひあるさ海をこえまて
なしおてぞろしなれど世るうきさかやうそて
こぐろしりつ峯（夕）ねの君もおもひなくめやすさ
さ海よこぐまり給ぬれば心おちぬそてなて
今は候いもとげなんとおほしなる女いの上（生）生れ
あり海のくまてぐさまも（静好）中ぐぬおりし

まかうなれはころよとなり。このはかなきも、
世にもちられたる中宮ざいゐすてまうせさせてのちのへ
それはさりとも中宮はしゆづりたり。冷泉の院のおんさとの
時にもちたるや。ご結婚またことも宰相の御志のおんへだても。
これよりはまたそめからず中宮はしおかりゆく。
此おけんじよりそちるなりのおんなれども院堂のこと
なを中宮やうよりもはじめたりて中宮にまうら世を
いそぎあるりその秋を上天皇にあつかりつる位を
あそこふかくまでつきたうかりなどこれを結。
くらぞも世の院心はよろこびぬとおもひけれどもちゆ
めぐりもつて昔の時をかくして院団ども色など

ありさ御ことはりかくしうなりそえひまんへは酒に
まつりのんべきことさるおんべことさぞ。くはおぼし
けらしても我おぼすことなどはおぼしして世中を
ゆづりて位をゆづり冷泉院の御ことをおん。秋夕の
わかなげさくる大臣の御あらかなりて宰相中将中
納言になりかねたまよろこびに出家ひとりまいとど
まさりおんくる御かたよりはじめておかぬこと
なるさおかじのおもふおもあるく人になさるれ
まじきやうへよりもとおぼしあつり。雲居のかりの
亀山ふのめれど位すくさをつゆのしきほかりの
ことものとおりくにおぼし出なれば

おもしろくて。うけろひうろな給ちきてし
おさなごより我袖のうへをみてもこき光の
なとうけたまや。うしろうしろのひとことどもてそ
わすられぬといひとまはひやまはおぼえてまゐる。
ちごしうことおもしろしとうけしうきはう
かの葉よりおなくてみそのさしあればあさき
なりくまもなりき。いまはころおもしろきまゐる
けつまうといふあれてくるしげる。これはひま
さりてかれすまぬおもしろせたれば。三条殿なり
わたりぬ。すうしあればまそといとめでたくすり
ちかしくて。ごやのおりしまきて方をあしくめさけ

らひて給ふ給。むかしおぼえて。義はちかき院なる
れすまぬあり。前栽どもなど。ちいさき木どももあり
しも。かれきしげになりぬ。むしの薄もころは
まねきてきこえけりけしきいろも給。やり水のみ
草もかきあつめて。いと心ゆきたるけしきなり。
おもしろき夕暮のほどを。ながめすぐしてをかし
ましらぬ世のれかくれもなれ給。かくして給ふ。
見しことどもおぼえて。人のおもひよることもなく。
ざうしはまろいづかたへども。のまゐらせず。
まりて。いとかれしとおもひあへり。かげろふのぼりあひ
おもひ給ふ。

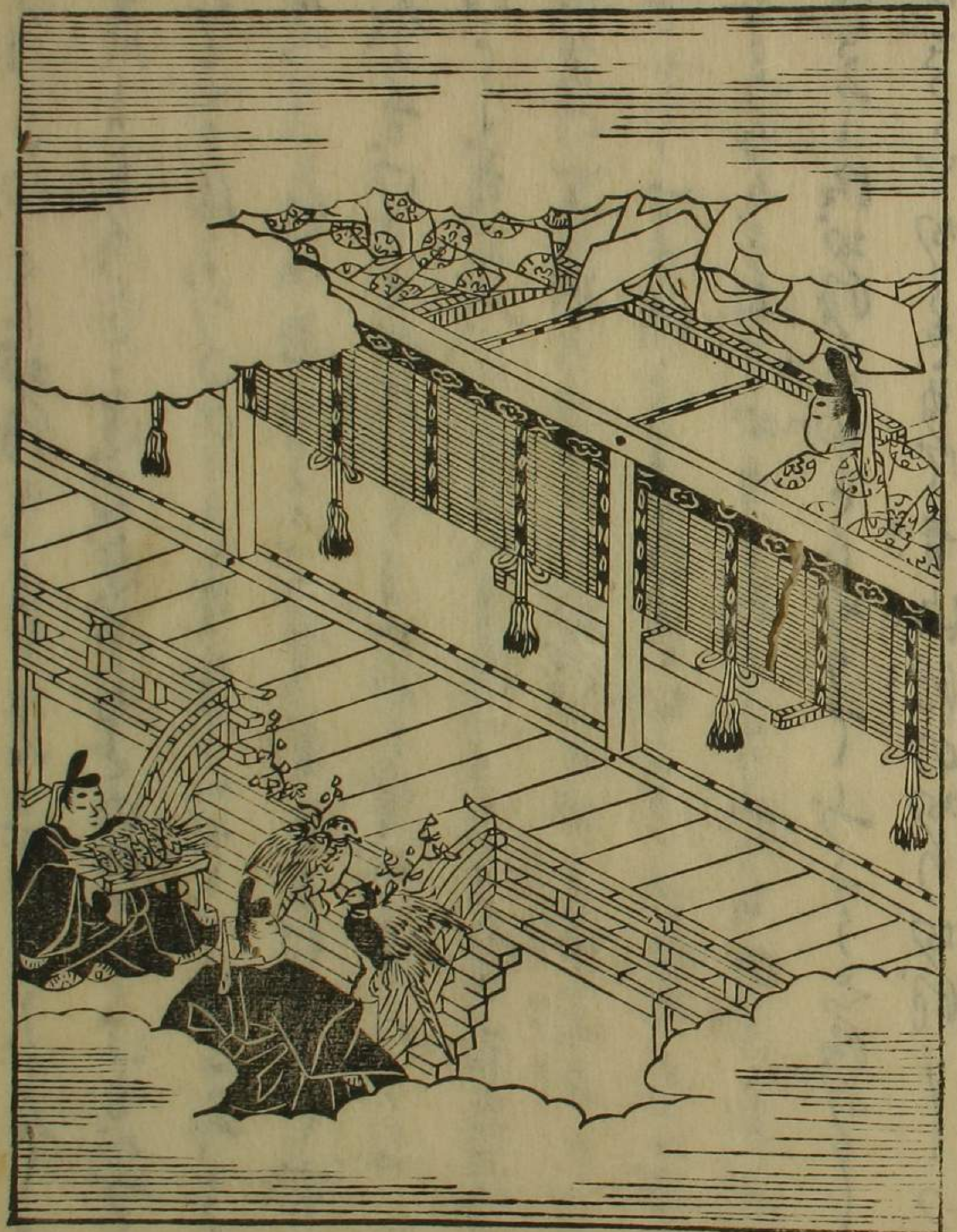


あれこそは岩まちわびし人のゆふべ
あやなどれましかば、女房
あまさん人のけぢめ見えずつれなくてうろたへ
やれのいそねの水、かどのゝふけどもれ、おとく
うらうらまうで給けるを、紅葉のあまなどろ
されて、ひとりかへりき

むかしおはしましゝ御ありさまにもおさ〳〵
かはることなく、あたり〳〵おとなし
くすまひ給へるさまはなやかなるを見給ふにつけても、
いと物あはれにおぼさる。中納言もけしきことに
かほすこしあかみて、いとゞしづまりて物し給。
あらまほしくうつくしげなる御あはひなれど、
女はまたかゝるかたちのたぐひもなどかなからんと
見え給へり。おとこはきはもなくきよらにおはす。
ふる人ども御前に所得て、神さびたることども
きこえいづ。ありつる御手ならひどものちりたるを、
御らんじつけて、うちしほたれ給。この水のこゝろ
たづねまほしけれど、おきなはこといみしてとの給
そのかみのおいきはむべもくちぬらんうへし
こ松もこけおひにけり。おとこぎみの宰相のめのと
つらかりし心もわすれねば、したりがほに
いづれをもかげとぞたのむふたばより　ねざし
かはせる松のすゑ〴〵　おい人どももかやうのすぢに
思ひつめたるを、中納言はおかしとおぼし、女君も
あいなくおもてあかみて、くるしと思給。神な月の
廿日あまりのほどに、六条院に行幸あり。紅葉乃
さかりにて、けうあるべきたびの行幸なるに、朱雀
院にもせうそこありて、院さへわたりおはします

へられば世に絶えずしくありがたきことどもにて。
よの人もこころをおどろかす。おうじの院がくも。かの心
をけらしめをもあやなかるまうけをさせ給ふ。
この時よりおんわりて。まつむまむの殿(との)に。左右(さう)乃
つかさの中むまひきならべて。左右のを勝ちまひ
かるさまうぶ月のきちにあやめもれむぞかうひ
かりびつづくかほどよそれこのきん殿(でん)にまうけや
おりしますこちの猪そりそひて発にいましこ給
さきおかいあるべき事はいさんしやうなをひきさけ
らしきれさをかへりびうしの池に舟どもうけて。
こうしどころのうかひの鵜さ。院(朱雀)の鵜(う)かひなさめし

あらべて鵜をかろさをきまへりちいささかれども
くひかりけざされゆかんとはあけれどすゞさき給
うちのけうぢりは嵐山のもみぢいいげうくを
そらしねどよしの物まの人は心ことなりを中の
らうのへべをくげし中門(ちうもん)をひしくさてきらのへぶて
あくてゆかんぜさせのみ御座(ござ)かうけよそひておは
あじのれ座いくぶれりなをきんじまでおはせさせ
給ほどしめでくくこえれどこうどいれりぐぶりあり
いやしくきをけらして。こきなり給きぬことも給
あんかばしけり池のうきてだのかれとり蔵人所乃
さうぶひのか料まうりつかまれりやすひと



つひなど。たのまけさげて。しんでんのひんがしより。
おまへまいりて。みはしのひだりにまいり。ひざを
つきてそうしけり

ちほさきおもしろく・おほしめして御かうじては
それにあかうこ逢ひ給ふなどのはまうけもめづら
しききはみつるのことゞもをえてつかうまつるを
まへりしは思ひはなちて万葉うる行まじく袖の
人めずけざとれ大ぐにあはずちきめしき・
ほどに秦ども人ワうなべまひつかまつり・朱雀院の
紅葉の賀・御のうちおぼし出る・賀王恩とい
ふことをする時とは・おほききおほくのはおとこの十
ばかりなるおもしろうまふ・ちのゝうどはぞ
めでて給・おほきおとゞおりてふかうきし給・おとゞの
院ざくとおもきまて青海波のおりおぼし出

冬まもろまがきの菊もおりくに袖打かへし
秋をこひし・おとゞそのおりいおもひ舞はうち
あはび給し給しなど見れも人まなきぐれさまぬ人々
身ながらおもひてのきらくにきおりけり経覚し
としろ時雨おりきりかはあり
紫の雲にまがへるきくの花にごりなき世
ほしかとぞ見る時こそありけれ給・夕風吹しき
くもみぢの色々さうすさうしきしこき うろ
ワきある人にまじふ庭の面にくらちおりしきま
らうへのやむごとなき家のそだちなどうそおぼさ
おりをちーつかうまつりえび楽などつるのごとし。

例の川しろくひろくハぢうり高邑をこえてこじうさ
地どまをほのまま雑川く紅葉のげろりく人々と
いろほど日のくろくもいとおもしげあまりがく哀あはれ
おもしろくもハとずうく人のれあそびなど・よりて
かむのつきのれとらじもめす地のけりきちかする
ほどなれ前ほこれれことぞまいれりふらの法し
のこころぬ高も朱雀院ハいとめでたしく哀る
こそしめす

朱雀
秋なんて時毎あり鈎りの人もころきもみぢの
おもそころよ池うしめしぐろぞあほしこうやこそど
冷よれつるの紅葉とやころいろ人のこあしる

ひけり庭のうしきを池中し志つしを詔れ冷りくるち
いかくねびこくのゆりありてぶじひとい出れとくえ
えさせ詔を夕中納言のさまふひ詔がかくなすへぬ
よそめざ殿しうあれ・おそまめでこころけらくひや
おまひあうしまをとりまさらんおぎやうりまい
りしきところハそひてえくあもふえつりまり
詔いとおもしろしきうぶれあどんべきらしう
きふふ中よ弁の少将のこゑをぶれさり・れきる
べきまころそしうれあうしひあめり